〔講演会〕

東亜同文書院（のち大学）と私

東亜同文書院出身、愛大23年卒　小崎昌業

【司会】 それでは時間がまいりましたので後半へ入ります。よろしくお願いいたします。短い休憩時間で申し訳ありません。次は小崎昌業先生からお話を伺います。先生は東亜同文書院大学の42期生、昭和16年のご入学です。引き揚げたあと愛知大学にご入学され、外交官試験に通られまして外務省でご活躍になり、モンゴルやルーマニアの大使をされておられます。現在われわれ東亜同文書院大学記念センターの運営委員もやっていただいています。では先生よろしくお願いいたします。

【小崎】 小崎です。私に与えられた時間は20分と非常に短いので要領よく話したいと思います。

私は1922（大正11）年に中国山東省の青島に生まれました。小学校の時に日本へ帰りましたが、青島の美しい風景は今でもよく覚えております。子供心にも蒋介石が北伐をやった時の済南事変、山東出兵、そういう一連の事件を覚えております。私は滋賀県の水口中学を卒業し、上級学校へ入る時に、やっぱり中国大陸に関心があったものですから、同文書院の他にいろんな学校を受けました。ハルピン学院も受けたんです。合格したんだけれどもやっぱり同文書院がいいと思って書院へ行きました。同文書院の42期生です。大学は3期生、全員で172名です。東京の九段坂に軍人会館というのがありまして、新入生は全国からそこにまず集合しました。このあいだ軍人会館に行ってみたのですが、昔のままですね。引率者は2期生の林出賢次郎さん。この人は日露戦争の時にイリ（伊犁）というところまで何百日も歩いて苦労して行って、調査して帰ってきた。イギリス政府から要請があったから西域調査をやらされたんですが、2期生のうち5名があの辺を回って調査したということです。その林出さんに連れられて、われわれ172名は東京から伊勢、京都、大阪、長崎に立ち寄り、われわれの学校の創立者である近衛篤麿公（当時の貴族院議長でした）、荒尾精（荒尾精は明日追悼式をやりますが、亡くなった時近衛さんが非常に惜しんで、京都の若王子に大きな碑を立てております）、根津一（根津先生は院長を20年やっておりまして、その根津精神がわれわれに染み通っております）、そういう三先覚の墓参、東京では召見式、会長の茶話会、皇居その他いろいろありました。関西では、大朝、大毎等、新聞社の見学をして、そして長崎から船で上海に行った。1日で行きますから、船は。東京から上海まで行くのに10日かかりました。この10日の間、われわれは寮歌とか院歌を学習して、上海の碼頭に着いた時には、校旗を振って出迎えてくれる上級生の代表が来ていました。われわれは船の上からそれに応えて、院歌、寮歌の大合唱が天下にこだましたのを覚えております。

それからバスを連ねて国際都市上海の中心街を通り、当時われわれの学校があった徐家匯（ジカウェイ）に行きました。われわれの学校は最初は桂墅里（クイシュリ）にあり、

それが第2革命で焼かれたものですから赫司克而路(ハスケルロ)に移りました。それから今度は本格的に大学校舎を作ろうということで徐家匯の虹橋路(ホンジャオロ)に理想的な校舎を作ったのです。これが書院の最盛期で、20年間続きました。この虹橋路の校舎は第2次上海事変（つまり盧溝橋事件）のあと、中国軍に三日三晩焼かれて無くなったのです。それで近くにあった海格路(ハイコウロ)の交通大学を租借してそこに入りました。

われわれが交通大学に着院して朱塗りの大きな大学の正門をくぐり抜けると、院子（イワンズ、庭）の目に染みるような青い芝生が見えました。絵のように見えた文治堂の時計台。大きな校舎でした。それから上級生の長髪、髭面、そういうものがもうほんとに絵に出てくるような美しさでありました。そしてその晩は、各府県別の県人会の歓迎会がありました。そこで汚れたレンペン（洗面器）、普段はふんどしを洗って汚れているようなやつをちょっと洗って、老酒やらを入れて飲めって言うんで、回し飲みをやりました。喝酒（ホウチュウ）、乾杯、それから同時に先輩がクラブ活動の猛烈な入部勧告をやるわけです。私もラグビー部に入れてやると言って引っぱられ、ラグビー部の部屋に放りこまれてなかなか出られない。そうしたらたまたま僕の県人の先輩がラグビー部の人だった。あいつどこにおるか、ああそこだ。それで出しに来てくれました。頼んだらお前はそんな小さい身体じゃラグビーは無理だと言うんで庭球部へ入りました。そのあと窓ガラスが全部吹き飛ぶような寮回りをやりまして、東、西、南と3つあった寮の夜が更けていったのでした。

翌日から書院独特の学生生活が始まりました。一口に言いますと質実剛健の気風の中に根津一院長の教えが浸透し、礼儀正しさ、先輩後輩のあいだの親密さ、恥を知る律儀さ、それから好んで苦難を辞さない道義的勇気が校風だったのです。上級生は朝晩庭で、われわれ中国語のできない新入生を呼んで、中国語の発音を教えてくれるんです。これが「アー、アー、アー、アー」と聞こえるので「書院カラス」と言いました。それから下級生は食堂のテーブルの端に座って上級生の飯つぎをする。長いテーブルに6人ぐらい座るわけですね。端の下級生が上級生に飯をついだり、汁をよそう。そういう生活です。われわれは全員部活動に入りました。ですから教室の中では無い親近感が、そういう部活動で生まれたわけです。教授達の人間的な触れ合いというのも昼間の教室の中だけじゃなしに、夜なんかは部屋に呼んでくれます。教授も同じ学内に住んでますから、誰でも出てこいと。行くとちょっと酒を出してくれるわけですね。ウィスキーを紅茶の中へ入れたりして、濃いか薄いかというような調子で飲ましてくれる。中国全土に跨がる先輩後輩の関係、大旅行、運動会、演芸会、好的(ハオダ)会、部会、県人会、先輩訪問、その他夢多き青春生活が、忘れがたい貴重なものとして育まれてました。

学友会は運動部と文化部が設けられて、書院生は入学すると全て学友会に入りました。硬式野球、硬式庭球、軟式庭球、それから柔道、剣道、ラグビー、サッカー、バスケット、陸上競技、相撲、弓道、水泳、卓球、馬術、ボート等があり、毎日賑やかでした。私は庭球部に入りましたけれども、新米で入って草むしりやローラー引きばかりやらされて、これじゃ面白くないからと言って、ボート部があったのでボート部に入りました。それから馬術部ができて馬にも乗りました。

また文化部には講演、学芸、音楽、YMCAその他がありまして、たとえば学芸部では中国問題を研究し、会報の『滬友』という雑誌を出しておりました。また会誌で校内への文芸作品を発表しておりました。

東亜同文書院というのはどういう学校かと申しますと、まず1898（明治31）年に近衛篤麿を盟主として設立された東亜同文会によって1901年、上海に開学した3年制のビジネススクールであり

ます。その先駆は1890年に荒尾精が上海に設立した学校、日清貿易研究所であります。この荒尾さんはその前に参謀本部の中国研究をやってた方ですが、中国研究のために参謀本部を説得して中国へ行くわけです。そこで3年間の研究を終わって、どうしてもこれは人材養成のための学校を作る必要があるというので日清貿易研究所を作りました。150名の学生を集めて上海へ送るんですが、それが日清戦争で廃校になります。

東亜同文書院は近衛さんによって支那を保全するという綱領をもって設立された学校です。徳育と知育に重点を置き、日中友好の実務に役立つ人材育成を行なった。特に根津先生による人格教育によって書院精神という特徴を生んだのであります。校舎は上海の租界外に開設され、3年制のビジネススクールでしたが途中1920年から4年になります。1939（昭和14）年には大学に昇格しました。学生は全国の各都道府県から派遣生として選抜されました。私費生もおりましたが、派遣生が大部分です。国庫の補助金は受けたんですが返済の義務は無い。就職先もきわめて自由でした。最高学年になりますと中国各地を調査旅行します。これを「大旅行」と言いましたが、その記録を卒業論文に書く。それを集めて東亜同文会から『支那省別全誌』を十何巻も出したんですね。

ところが私共が行きました時にはもう日中戦争が拡大しておりました。1941（昭和16）年12月8日、大東亜戦争が勃発します。翌年1月に予科の1年を終わりまして、2月には予科の2年になります。学期末には江南の春を衝いて南京、蘇州旅行をやりました。いろんな思い出が残っております。非常に楽しい旅行でしたが、これもあっと言う間に終わりました。9月の末、内地の高等商業学校から12名が編入学して42期生は総勢で183名になりました。戦争の進展と共に大旅行の実施も制約されてきましたので、私は予科2年の時に1人で華北、蒙古旅行をしようと思い、学生監をやっていた林出賢次郎さんに頼みに行きました。そうしたらこの方は、非常に情勢の変わったところに行くのだから気を付けて行けといわれて、いろんな注意とお守り、観音様を信じておられましたから観音様のお守りを頂いて、1942年6月14日朝、青島丸という船に乗って青島まで行きました。

翌日青島へ着きましたが、それから時間がないので訪れた地名だけ申します。青島から済南、徳州、石家荘、楡次、平遙、太原、汾陽、離石。離石で思い出に残ってるのは警察署長が夕食に呼んでくれたんですが、向こうの家は屋根が平たいんですね、そこにテーブルを置いて料理を並べ、そこで酒を飲む。皓々たる月光を浴びて、銃声が聞こえるんですよ。その中で飲んだ酒の味は忘れられません。離石から汾陽、平遙、また太原に戻りまして、太原から大同。大同では石窟を見に行きました。ここでかわいい中国人の女の子が3人ばかりいて、日本語がうまくて、非常に楽しい思いをしました。それから包頭に行きました。包頭から厚和、厚和から張家口。張家口では大蒙公司の尾仲嘉助という先輩を訪ねていって、非常に世話になりました。そしてドロンメール行きの車の手配をしたんですが、行く朝になったら大雨が降ってまして、荷物の上に乗っていくのは無理だというので旅行を止めました。そこから北京に行きました。北京の中国人のところに泊まり、大使館の棚平桂先輩を訪ね、あっちこっち見学しました。北京から釜山行きの列車に乗ったのですが、途中で可愛い女性と一緒になり、釜山で一泊することになりました。この女性は船に弱いので、下関までの船中で色々世話をしましたが、下関で別れました。この方は佐賀県武生の人でした。私は京都へ戻りました。

私が旅行したこの1942年当時、中国大陸における在外公館（大使館、公使館、総領事館、分館）はたくさんありました。38ヵ所あったのですが、たとえば新京、ハルピン、黒河、牡丹江、満洲里、北京、張家口、大同、厚和、包頭、天津、唐山、

塘沽、山海関、その他でそのいづれの館にも書院の先輩がいました。この当時の外務省の先輩には錚々たる人がおりまして、アメリカ大使館には若杉要という公使がおりました。対米交渉の時の実質的な交渉はこの方がやっておられました。それから石射猪太郎さんは5期ですが、本省東亜局の時に盧溝橋事件が起きて日本から軍隊を派遣するという時に猛烈に反対したんですね。そのあとも、「今後の事変対策についての考案」なる大論作を書いて、今でも外務省には、この人を尊敬してるという人が多くおります。石射さんの『外交官の一生』という本が出てますが、非常に面白い本です。もしご興味のある方は買って読まれるとよいと思います。それから堀内干城さん。この方は東亜局長、それから中国公使、上海総領事をやっていました。有野学さん、この方は済南総領事。山本熊一さんはアメリカ局長兼東亜局長。後に外務省の次官に、更に大東亜省の次官にもなりました。

当時は戦時下でして、相当危険な地帯もありましたけれども、私は生命の限界に挑戦するような気持ちで旅を続けました。一文無しで、行き当たりばったりの木賃宿で南京虫に食われました。ほんとに南京虫というのは困ったもんで、夜なんか電灯を付けるとパーッと逃げるんですけど、寝てるとまたベッドに這い上がってくる。ついには机の上に寝るんですけど、これでも上がってきて参りました。駅で寝たり、列車の硬席車で中国人の乗客と弁当を分け合って食べたり。そういう旅でしたけれども、中国を旅行したことは非常に私には勉強になりました。最後に頼りになるのは同窓会の名簿1冊。それを懐に入れていきまして、金が無い時には何日でも泊まっていけと、一面識も無い先輩が言ってくれる。書院という学校の世にも稀なる同窓会の絆の強さに心打たれたものです。

学徒動員で兵隊に行きました。1943（昭和18）年10月18日の「教育に関する非常措置」が決まって、生徒の徴収延期が廃止になったんですね。10月25日から北四川路の武徳館で検査を受けると。ほとんどの学生は合格ですね。ところが北野大吉という学長代理がちょっと日本へ帰ってこいと一時帰国を許してくれまして、10月30日、上海丸、熱河丸と2隻の船があったんですが、当時もう東シナ海に潜水艦が出没してまして、いつやられるか分からない。それで船足の早い上海丸にみんな殺到したんだけど、私は熱河丸に乗った。そうしたら翌朝ものすごい音がして船がひっくり返るような大揺れになり、これはやられたと思って上甲板へ上がって行ったら、実はこっちの船じゃなくて向こうの上海丸と御用船が衝突したんです。朝五島列島に着いたら上海丸に乗ってた学生は救命ボートに乗せられてあそこへ着いてましたね。それから一部はぶつかった船に乗せられて台湾まで持っていかれた。しかしまあ入隊までには戻ってきました。

12月1日に南京の61師団に入りました。盧州（または合肥）という所で初年兵訓練を受けて、昭和19年の3月に経理部の試験、5月に南京教育隊、7月に経理部幹部候補生として南京経理学校、通称成賢部隊ですが、ここに入隊しました。1期生は12月に卒業するんですが、私は2期生の教育をやれと言うんでまた1期残りました。2期生の卒業を見送って翌年の5月に原隊に復帰しました。原隊は南京から上海に移動していて、司令部は八字橋にありました。師団司令部付の主計将校でしたが、沖縄から大陸沿岸沿いにアメリカ軍が北上するんじゃないかというので呉淞（ウースン）の陣地構築の主計もやりました。ところが8月8日ソ連が参戦し、日本は14日ポツダム宣言受諾、15日終戦ということで、そのあとのことはいろいろありましたけど、とにかく各部隊は3か月の必要資金を渡すから引き揚げ帰国まで自活せよとの命令下に、上海にあった横浜正金銀行、今の外灘にありましたが、そこにトラックで行って車一杯の現金を持って帰り、各部隊に、そっちもトラックで取りに来いと。それで全部配りました。とにかく

あれだけのキャッシュを扱ったのは生まれて初めてでありました。

書院に帰ろうとして現地除隊したんですが、交通大学の校舎は中国政府に接収されておって、私は虹口の内山書店の裏側に千愛里というところがあるんですが、そこへ寄留しまして、小岩井先生に来てもらって日本はどうなるだろうか、われわれは今後如何に生くべきか等についてゼミをやってもらいました。そのうち国民党政府に中央宣伝部対日工作委員会というのができました。辞令をもらい、私は同志と一緒にそこに入りました。ところが結局中国側の態度がはっきりしないので喧嘩して日本へ帰りました。帰って翌年豊橋に愛知大学ができるというんで小岩井先生からお呼びがあって私は出かけていきました。学生委員長などをやらされて、あまり勉強できませんでしたが、1期生で卒業しました。あとは外務省へ入りましてあっちこっち回りましたけども、ともかく東亜同文書院大学に学んだ者は、45年間で5,000名です。そしてその活動分野は、毎年外交界、言論報道界、学界、実業界、金融界、南満州鉄道、満州国、その他官民各分野にわたっております。特に日中貿易の主役を務めた人が多いです。戦後東南アジア各国に駐在する商社や在外公館に、驚くほど同文書院出身者が多かったのは、書院は滅んでもその書院精神は日本国民とアジア諸国民の関わりの中で脈々と生きていたからだと思います。以上で失礼したいと思います。

【司会】 どうもありがとうございました。短い時間でお願いしまして。何かご質問ございませんか。はいどうぞ。

【参加者】 すみません、何かどうでもいいような質問ですが、1992（平成4）年に東京の日比谷で旧制高等学校の寮歌祭がありましたね。今も続いてますか。

【小崎】 今もやってます。

【参加者】 えっ、まだ？　そうですか。

【小崎】 東京の霞が関にもとは文部省と会計検査院と2つビルがあったんですが、それを潰して大きいビルが2つできた。その会計検査院ビルのトップの37階に愛知大学の事務所があります。名古屋の笹島、駅のすぐそばですが、愛知大学は今そこに校舎を作ってます。再来年完成したらそれを新しい踏み台にして、アジアに羽ばたく愛知大学ということでまた全国寮歌祭をやろうと計画しています。

【参加者】 とてもあの時は感激しました。ありがとうございます。

【小崎】 はい。

【司会】 どうもありがとうございました。あとよろしいですか。では小崎先生どうもありがとうございました。